

心理学の国際化について

東京大学大学院人文社会系研究科教授

佐藤隆夫 (さとう たかお)

大学院生の頃、自分が読む論文は英米のものばかり、また国際的な論文誌に、日本人の論文が出るとおおっ！という感じでした。その頃、ある大先生に、予算、設備、研究の下地がまるでちがうんだから、アメリカに対抗しよう何て考えちゃだめですよと言われたこともありました。じゃあ、あいつら、どんな風に研究をしているのか見てきてやろうと思ったのが、博士課程の途中からアメリカに留学した最大の理由でもありました。行ってみたら、大違い。ハードウェアも、ソフトウェア（研究支援体制）も大違い。これじゃ、駄目だよなと痛感しました。

その頃に比べると、日本の状況は変わったような、大差無いような。確かに、今では、国際誌に毎月のように日本からの論文が出ていますし、予算、設備の水準も大きく変わりました。欧米に出て行った卒業生が、マシンが古い！ 数が少ない！とこぼすこともあります。研究発表について、知覚を例に具体的な数字を見てみましょう。Perception 誌に日本から出た論文を数えてみると、1970年代はゼロ。80年代は8本、90年代は45本、2000年代には98本の論文がありました。またアメリカ最大の視覚関係の学会である ARVO、VSS の年次大会を見ても、80年代には日本からの心理学者は数名ということもありましたが、今では毎年100名以上。少なくとも知覚の分野では、発表の国際化が確かに進んでいます。研究の水準を見てもトップのレベルは引けを取らないと思います。しかし、平均的にはまだまだとも、また、良い研究でも国際的な評価をあまり得ていないとも感じます。言葉の問題、繁忙、支援体制が弱いなど様々な理由に加え、若い研究者の意識として、研究の現場はシームレスに世界に繋がっているんだという意識が弱いとも感じます。そうした意識を高めるためには、人的な交流を盛んにして行くことが一番ですが、組織としての学会もシームレスに世界に繋がっていることが必要でしょう。

2016年には横浜で国際心理学会議（ICP2016）が開催されます。この会議は4年に一度開かれる、世界最大の心理学の国際会議です。日本の心理学のさらなる国際化を目指すよい契機でしょう。具体的には、なにせ理事長ですから、まずは学会の国際化ということを考えています。そのためのはじめの一歩として、現在、中国、韓国、オーストラリア、南アフリカの心理学会と結んでいる交流協定を、もっと多くの国々と結ぶことから学会のシームレス化を目指そうと思っているところです。



Profile — 佐藤隆夫

1974年、東京大学文学部卒業。1976年、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1982年、米国ブラウン大学大学院修了。Ph.D.（実験心理学）。電電公社武蔵野電気通信研究所、ATR視聴覚機構研究所、NTT基礎研究所を経て、1995年、東京大学大学院人文社会系研究科助教授、1996年、同教授。専門は知覚心理学。特に運動視、立体視メカニズムの実験的解析、モデル化。2011年6月4日より、日本心理学会理事長。